

ヨナス『生命の哲学』の可能性

著者	高橋 建夫
著者別名	TAKAHASHI Takeo
雑誌名	東洋大学大学院紀要
号	54
ページ	105-115
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009701/

ヨナス『生命の哲学』の可能性

文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学

高橋 建夫

序章

『生命の哲学』の中で、ヨナスは、生命の「この冒険の意味は何か」と問うならば、「ただ生命が根源的に危うい存在であること自体のみ」と答えるという。哲学的な生命の定義は様々できるが、この著作『生命の哲学』の扱わねばならない事柄は、生命の客観的形式は、反省という形で生命の自己解釈であるとしている。有機体は（物質交代、感覚、運動、情動、知覚、想像力、精神といった形で）世界の要求に対処する（環境適応など）さらに、「生命の哲学」ではまた、道徳、形而上学にも言及し、生命を考察している。

本稿ではこれらの議論のうち、ヨナスが現実の人間の真理をどのように主張しているかを際立たせ（人間「自分自身」とは何か）、彼の哲学によって、人間とは何かはどう答えるかを探り、その解答の吟味をする。その上で世界の見方をどのように豊かにできうるかを課題として考察し、ヨナス哲学を吟味することによって、どのようにすれば人生を100%肯定的に考えるうる哲学を構築できるかを探る。つまり、哲学的思惟をどれだけ発展させうるか（哲学の有意義性）を考えてみたい。

第一章 ヨナス『生命の哲学』からの中心論点

ここではこの著作から6点にわたり、要点を取り出していく。

<1-1>生命の危うさ（人間とは何か。なぜ人間は危ういのか。）

まず、そもそもヨナスの言う「ただ生命が根源的に危うい存在であること自体のみ」という言葉の「根源的に危うい」とはどういう意味なのだろうかを考えてみたい。神が存在するとき、それでも根源的に危ういというのはどういう状況のことが彼の念頭にあったのだろうか。つまるところ、神は理解できない存在であるというのだろうか。全知全能者のような神が現実の背後に存在しても危ういと考えerということは、神は我々の安全を保障するような存在と考えていないのだろうか（創造はしたが、その後の現実の進展には介入しないような神を考えているのか）？ヨナスの真意は、有機体である我々という存在は、生存を危険が伴

う現実の中で延長する（例えば、危険でも狩り〔仕事〕をして食物を取るなどする）ことのみによって存在を継続しうるため、根源的に危ういとのみ言っている。

<1-2>「人間とは何か」、「事物の見取り図の中で私の占める場所はどこか」

人間は図像能力（p.285 第九章 ホモ・ピクトル、あるいは像を描く自由についてより）を獲得し、自己反省する思考能力をもつに至った。それらは例えば、反省、似姿、Das Bildなどの言葉を思い起こしてみれば理解できる。つまり、表象能力により、人間の根源的な似姿を反省的に考えることができるようになったことによって、人間は、自分自身とは何かの答えを導き出せるようになった、とヨナスは言う。自己反省能力（ヘーゲルの自己反省）とえば、ヘーゲルは絶対精神を「自己自身を知る精神」と定義しそれが『精神現象学』で問い求めた真理の内実であったわけだが、ヨナス哲学もこのヘーゲルの考え方に親和性がある。そのプロセスからヨナスは「人間とは何か」p.335「事物の見取り図の中で私の占める場所はどこか」という根源的な問いに答えようとしている。我々とは何かと問う領域を人間は生来的にもっている存在である、と一般的にはいえよう。それゆえ哲学者は様々な人間の定義をするわけだが、たとえば、ヨナスは人生とは自我の冒険であるという（具体的には成功にも失敗にもなりうる挑戦のようなものなのである）。これが、1-1の「根源的に危うい」ともつながってくる考え方であろう。「驚き、探求し比較するこの眼差しの隔たりを經由して「自我」という新たな存在が構成される。間接性と客体化のあらゆる冒険のなかで、自我こそはもっとも大胆な冒険である。」人間は図像能力として、自分たちの狩りの対象の雄牛と自分自身すら描いており、自分の振る舞いや心の状態、つまり描くことが不可能な像に注目することで、人間は、完全に具現化される。（p335）

<1-3>似姿として造られた人間

人間は人間という理念を「生きている」。つまり、人間が神の似姿〔像〕として造られたということは、人間が神に準ずるような人間の像（例えば、全知全能、永遠、慈悲深いなどの内実を持つ〔筆者加筆〕）とともに生きねばならないということであると、ヨナスは「像Bild」概念を使って述べている。具体的には、神からの理念、ここではグノーシスの比喩を使って「似姿」について説明している。人間が人間の理念を生きているのはどうしてか—我々は人間を人間として描き出した定義者ではなく被定義者であるから、ヨナスは我々が被定義者として生きる（生かされる）ということがどういうことであるかを、自覚的に示している。

ヨナスは天上界にもう一人の自分がいるというマンダ教のテキストから引用している。一時的な地上での失敗体験のあと、もう一人の自分と再会し、クライマックスを迎えると「似姿」について述べている。そして「像」についても社会を通して獲得されるとしている。

<1-4>行為の不死性〔具体的には永遠の行為に不死性を見ること〕 ヨナスは不死性それ自体は「超越的な対象」であり、「認識の対象ではない」がゆえに「行為の不死性」を比喩を通して表現しようとする。不死性は普通証明されえないが、行為の不死性が成立する理由は、

良心から行為は起こり、その行為は我々の不死なる側面に由来しているからであるとヨナスは捉えている。不死性の根拠は以下のとおりであるとする。「私たちが良心の叫び声において、最高の決断の瞬間において、献身的な行為において体験し、後悔による苦しみににおいてさえ体験する感情—を形而上学的に正当化する客観的根拠を差し出すことができる。そしてこれらの経験がおそらくはきっと、私たちの本性が持つ不死なる側面の唯一の経験的な印し、私たちの批判的な意識がこんいちでもなお証言として受け入れる準備のある唯一の印であるだろう。」 p432

まとめると、私たちの中にある良心的なものは不滅であり、神に由来するゆえ、形而上学的に正当化することが客観的にできるということだろう。つまりここで筆者の考えるヨナスの神は善であり、それゆえ人間の善性も永遠なものであるということであり、そしてそれが私たちの本性が持つ不死なる側面の唯一の経験的な印しだということだろう。ヨナスは理念としての不死性があるとする。

<1-5>生命の矛盾（人間とは何か。なぜ矛盾性をはらむのか。）

生命の矛盾についても、それは、われわれが存在—非存在の並行的原理の上に成り立っている存在形態であり、それはつまり、生命の基本である形相と質料の関係は最終的には死に至るということを前提にしている。そのことの吟味の末、ヨナスは生命の含む「超越」について考察をしている。要するに、真理として我々のこの矛盾した状態は関係を超えた精神（神）に基づいていると考えうとする。この存在—非存在の二極性を明確に示す矛盾の現前を示すことができるとすれば、超越についての真理も示しうるのだと考えられる。すなわち、ヨナスによれば、我々は生かされているし、いずれ自らの死が訪れることに立ち返るとき、神の存在を示しうるのであろう。

ヨナスは生命を生老病死から逃れられないことを否定的に考え、不条理なものと捉えている。その理由は人間がその理由（なぜ生まれ死ぬのか）という疑問を持つからであるとし、ヨナスの真意として、生命現象はすべて神の意志であるということである。つまり、生命の神性の主張である。

<1-6>目的論 目的論と科学（人間とは何か。我々は目的論的存在なのだろうか。）

科学の機械論的世界観にも発展初期には目的論¹（ヨナスの考える神的なものによる）があった。神的ではない機械論的世界観の優勢が優勢であるのはなぜかといえば、目的論が衰退しているためだとするが、そのように論じるヨナスの真意は目的論の復権を重要視することである。しかし、ヨナスはもっと科学の功罪の功の側にも言及する必要はあろう。

宇宙と人間についての目的論との関係であるが、宇宙の謎に畏怖を覚え、人間が利用するために全て設えられているとか、宇宙がすべて隅々まで探求されうるのであるとするのは、人間の僭越的な考えではないかとヨナスは考える。実際そのとおりであろう。目に見えないからと言って摂理はないと断定はできない。しかし摂理すべてを説明することも人間に

はできないだろう。宇宙と人間の本性に目的因を考えるヨナスによれば、宇宙の本性と人間の本性に普通つながりは見つからない。しかし、つながりはあるのではないかというのがヨナスの主張である。ただし、宇宙への科学的アプローチを完全否定しているわけではないと思われる。

しかし、人間は、流転する宇宙の中に存在しているのであって、その宇宙のリズムに呼応して我々は生存しているのは明らかであろう。にもかかわらず、人間の本性と宇宙の本性のあいだに存在の根本的な差異を想定すること、これは、ヨナスによれば近代科学に奉仕している近代形而上学の根本的な想定である。このような（近代科学に奉仕している近代形而上学の根本的な想定）数学的・機械論的分析は観念論の死を生み出した。これをヨナスの言葉では、「内的経験の性質を外的世界の解釈へ転用することをすべて厳格に禁止すること」であるとする。しかしこれは、観念論を無視しているといいたいほど科学偏重であった時代におけるヨナスなりの警鐘の鳴らし方であって、彼が死んでからの環境技術の進歩や宇宙科学などいま彼が生きていれば、また違った見解を述べたのではないか？

また、この観念論でしか捉えられないものも現実として存在しているかもしれないという考え方が近代形而上学により捨象されているという意味は一面的で極端である。また、ここに運動を引き起こす力の探求の放棄・擬人論の消滅が起こった。数学的・機械論的分析では、「運動を引き起こす力の探求は、実体形相の探求と同様、完全に放棄される」と言われる。この運動を引き起こす力の探求は、アリストテレスの第一哲学の考え方の影響が強く出ていると思われるが、自然科学と形而上学が相いれないというわけでもなからう。

観念論と自然科学は双方重要な考え方であり、どちらに偏っても極端な論説になりうる。ヨナスは科学の行き過ぎに警鐘を鳴らしているが、反対に自然科学の重要性も語られるべきであるのは当然であろう。

同時に人格神の神とは擬人論では全く説明されないものだとすれば、神は完全に理解不能なものになってしまう可能性があるだろう。実際、人格神の軽視（人格的な神概念の軽視）も起こったとヨナスも言及している。しかし、これについても、人格神を目的論の究極のよ

¹ Teleologyギリシア語のtelos（完成や目的 [善き人生を全うする道を模索すること]）+logos（1. 概念、意味、論理、説明、理由、理論、思想2. [キリスト教] 神のことば、世界を構成する論理としてのイエス・キリスト3. 言語、論理、真理、の意味。転じて「論理的に語られたもの」「語りうるもの」）に由来し、人間の行為ばかりではなく、歴史的現象、自然現象も含めて、万象が目的によって規定され、支配されているとみる哲学説。機械論と対立する。アリストテレスは、事物の原因として質料因、形相因、動力因、目的因をあげ、神が究極的な目的因とした。

うに考えるのは行き過ぎた観念論的思考方であろう。

現実の本性、人間と目的因についてのヨナスによる目的論の説明は要するに、内面性を「人間の本性」とするか、目的論を「人間の本性」から追放してしまうかの二者択一的状況であるということであり、前者の目的論擁護に重点が置かれている。しかし、もう少しヨナスに反論しておけば、自然科学はそれ自体確実なものとして証明可能な確固たる内容をもった学問であり、観念論（内面）が全てではないと前提して内面性の重要性を述べるべきだろう。

目的論と真理は、漠然と捉えることが人間の限界のように思える。しかし、追求をやめてしまうべきものではないのではないか。ヨナスによれば、目的論と真理は、アリストテレスの観想によっては理解され得ないという。「自然科学がアリストテレスの（理論を〔観想〕として捉える）見解をほとんど修正した」と自然科学批判ととれる発言をしているが、目的論擁護に重点が置かれ過ぎている感が確かにある。

無限の進歩の可能性については、追求すべきだろう。そして、観想が無効になる（必然性が理解されにくくなる）ことについては、例えば、シェリングが絶対者を直接的に把握しようとしヘーゲルに批判されたように、アリストテレスの観想もその方法論的内実を伴わないのではないか。アリストテレス的に無限なるものを観想するということができるのであれば、それでよいだろう。しかし、むしろ創造主の把握が人間にとって無限の進歩を必要とするものであるのではないか。つまり無限者である創造主の理解ということであれば、それは終わりのない努力を生涯追求することによって、より良い創造主把握をもたらす可能性があるということであろう。その把握が未完成に終わるのが目に見えているとしてもである。ただし、独断論には注意し、懐疑論、不可知論でもなく、批判的に考察を続ける必要があろう。

第二章 ヨナスの議論の問題点

ここではヨナス哲学のなかに含まれる問題点を吟味する。

<2-1>生命の危うさについての問題点。ヨナスは、生命は根源的に危ういと言っているが、しかし本稿では、筆者の考える神の全能の存在を指摘することによって、この説をよりポジティブなものに修正することも可能であることを示す。つまり、試練は与えられるかもしれないが、生命は危うくなどないと考えられるのである。ただし、ヨナス自身はアウシュビッツで実母をナチスに殺害されているし戦争に従軍（ユダヤ旅団の兵士として）もしているため、神の存在が生命の安全を保障するものではないのではないかという問いを考え続けた。（他の論文で、人間の自律を確保するために世界を創造したが創造の進展には介入しない神という想定に言及している）

<2-2>人間の図像能力についての問題点。

生命と反省は異なる仕組みだが、しかし生命は人間において反省能力を獲得した（主観性）。ヨナスの真意は、人間は図像能力のイメージを抽象的なものへ適用するということ

(振る舞いや心を表現すること)ができるということを示すことである。抽象的なものについてヨナスの言うことは、図像能力が自己を洞察できることなのだが、しかし本稿では、ヨナス説は固定的哲学的思惟のみにとどまるのではないかということ指摘することによって、人間は神の創造の神秘(無限定)であると修正することも可能であることを提示する。それは具体的には人間の能力は図像能力をもつにとどまらず、人間は神の意志そのものであるゆえ、想像力の可能性も無限に設定しようということである。つまり、それぞれの哲学者が人間とは何かを自己反省して考え、我々の心を表現し、哲学的に自己を定義し始めたヨナスは言うのだろう。それらの哲学者たちのそれぞれの哲学に真理性があるとしても、それらが全てではないのではないか。それよりもっと自由で非限定的な動きのある人間のイメージ作成も可能だろうと考えられる。というのも、いくつかの固定的な哲学的定義に収まりきらない領域を人間はもっている可能性があるからである。

<2-3>似姿についての問題点。ヨナスはこう言っている。すなわち、私たちは似姿とともに生きなければならないのだと。しかし本稿では、似姿の定義の曖昧さを指摘する。つまり、この説を一般論にとどまる解釈とすることで、人間は似姿の道を運命的に辿らなければならないというように考えを限定せず、もっと自由に人間は生きられると修正することも可能であることを明らかにする。

<2-4>不死性についての問題点。ヨナスは不死性について重要な考え方を述べている。しかし、本稿では、生の一回性や、死のもたらす新しい生(現実)への期待を指摘することによってこの説を、不死性にとられ過ぎており、もっと自由に柔軟に死についても考えられるのではないかと修正したい。つまり、自分というものが筆者の考える全能の神の意志で現実化し、現世に生まれたゆえ、その形態が不死でなくともまた別の現実化、いかえればいつかどこかにまた別の形で生まれることも神の意志(善性)で起こりうると考えられるゆえ、次の来世などの不確かな現実への移行も善として肯定されうると考えられる。

<2-5>生命の矛盾についての問題点。ヨナスはそもそも生命は矛盾であるとしているが、生老病死のプロセスは考え方によっては自然であり、ヨナスの説を取らなくても生は定義されうると修正することも可能だろう。つまり、生老病死も善なる神の意志の表れであり意義のある出来事として矛盾ではないものとして捉えられる事柄でありうるであろう。

<2-6>目的論について問題点。ヨナスは基本的に目的論を重視しているが、本稿では、目的論的・摂理について、はっきりと断定できないものを絶対的なものとして主張せずとも、人間の本性をより自由なものとしても設定されうるものとする。つまり、この目的論重視説を目的論を前提とせず人間を定義することも可能であると修正することができるだろう。例えば、人生の成功が約束されたものでなく、人間が努力して運命を切り開くことを神が望んでいるとすれば、成功することが目的論的に定まっている道を、始めから終わりまで進むことが決まっているというような、決定論的現実が生命の直面する現実の定義ではないわ

けである。

反論として、神のシナリオとしての目的論がそれでも人間に設定されている可能性（方向付け [richten] のようなものとして）は無視できないかもしれないと考えることもできるが、本稿ではこの神の導きのようなものを目的論とは別に議論すべきものとして論を進めたい。

第三章 残された課題

<肯定的哲学へ>これら上記第一章の6つのヨナスの論述は、人間に普遍的に起こってくる問い（人間とは何か）であり、それに答えることで、人間理解をより明確にできうるであろうと考えられた。そこから人間存在の定義を深め、実社会を豊かにすることに貢献できる内容を彼の哲学は持っているのではないだろうかと考えられた。しかし、ヨナスの哲学を基に反対意見も考え、思惟の多様さの可能性を指摘することによって、ヨナスの言説は一理あるが、上記第二章のように反対意見も提示しうると考える。それゆえ筆者はこれら対照的な考え方を基本にして重層的に思考を発展させることも理論的には可能であると考え、選択肢として提示したい。例えば、生命が死すべきということは確かに矛盾であると考えうる。しかし反対に自然で無矛盾とも考えられうる。つまり、人間は禍福をこの世界で経験する。その矛盾と無矛盾を両方ひっくるめて肯定するところに生命の存在意義への道が開かれるのではないか。そこからいかに生命を100%肯定しうる考え方が導き出せるかが問題である。

生命の危うさは、危険は避けなければならないため、現実の真剣な直視を導くという重要性を持つ。すなわち、自己反省の力は人間の優れた能力であるし、そこから、自分自身を神の似姿とイメージできることもほかの存在にない人間の優れた特徴である。また、不死性が良心から期待されうる理念であり、存在の矛盾の凝視から超越へといたるということも重要な人間解釈だろう。さらには、目的論について言えば、厳密にすべての現実を目的論的に解釈できないかもしれないが、確かにそれは真理性をもつ考え方ではないだろうか。しかし、哲学は自由に思惟する分野であるゆえ、第二章で見たように反論もありうるし、ヨナスの思惟に全て賛成ではないが、彼の思惟を基に、より発展的な思惟の有効性を主張したい。『生命の哲学』から「生命肯定の哲学」へと考えを発展させられる考えの手がかりがヨナスの哲学から多く読み取れるように思う。

<信じること、祈ること—ヨナス哲学（特に形而上学的思惟）との関連の考察>

本稿のなかでの哲学的議論として、人間は神をどこまで明確に定義していてもし尽くせるものではあり得ないわけだから、信じたり、祈ったりするという人間の行為の大事さは筆舌に尽くしがたいだろうことが焦点となる。これは言葉の内容が決まらないものを人間は本性上もってしまっているとも言い換えられるため、説明し尽くせない行為が人生にとって最重要であることもありうるわけである。また、ヨナスの真意からして、最終的には現実には神の意志であるという真意から、人間の思惟の最重要行為としての信仰と祈りを彼の哲学とオ

オーバーラップさせてもよいのではないかと考えた。しかし、神については断定できない部分がほとんどであり、信じること祈ることの重要性をヨナス哲学から読み取れるといっても、神というものの捉えにくさは残る。それゆえ、信仰・祈りは重要に違いないが、「信じ、祈る」ことで思考停止せず思惟を続ける（神概念なくとも）ことも選択肢として可能である、というように修正したい。つまり、例えば、信じ、祈りつつ思考することもありうるわけである。具体的には神概念の不確かさゆえ、とにかくまず信じ、祈りつつ（全知全能・永遠・慈悲深いなどと神の善性を理念として仮定しながら）それに加えて哲学的に神についての考えを深めてゆくのである。

＜ヨナスの考える神—筆者の考える神との比較＞ヨナスの神はユダヤ・キリスト教的な人格神を基本的には意味しているが、グノーシス的の面もある。ヨナス本人の不幸体験やユダヤ人の不運を考えたときに、ヨナスが哲学的に考える神は、創造しはしたが、創造の進展には介入しない神が前提とされているということでもあるようだ。それに対して、筆者の考える神は乗り越えられないほどの試練は与えない創造の進展に介入する神をというものである。

本稿の最終的なゴールはヨナス哲学を吟味し、その功罪を浮き彫りにした後、いかに人生を100%肯定的に考えることができる哲学を構築できるかを考えることである。それが可能になることによって、その哲学は世界をより豊かにすることにも寄与する内容となろう。核心的なことを付け加えるなら、ヨナス哲学は両義的なものがあるのだが、筆者の立場は神はそれがどんなものであれ、存在するのであれば、100%肯定されうるものだという哲学にある。その根拠は自身の現実は何とかなるものであるという経験的なことから主張である。したがって結論として、善悪ひっくるめて全体として肯定しうるのが創造主であり、そこから、試練が与えられている生命の苦境時に、その状況に耐え、やり過ごすためにも必要な考え方として、現実に対する考え方を100%肯定されうると考えることが重要だろうと結論付けたい。ヨナス自身もまた波乱な人生をおくったが、「世界は敵対的なところではなかった」と晩年に述べている。また、より肯定的な哲学的思惟の発展が、世界の豊かさの向上の拠点になりうると考える、つまり、最終的には肯定的に哲学することの有意義性を豊かさと結び付けたい。

ただし、生命を100%肯定することは、現代において、例えば重篤な病になったとき、人工的延命、安楽死など、その是非の判断を待たなしに迫られる場面も起こりうる世界に生まれてくることを肯定することでもある。例えば、人工呼吸器をすぐにつけないと死んでしまうがどうするか、致命的で末期的な病気で極度に苦しんでおり今すぐにでも苦しみを和らげてあげたいがどうするか、などの状況がありえる。つまり、常に神的介入が望まれるような場面での人的判断を祈りとともに行わざるを得ない、待たなしの状況が現実によくあることも含め大局的に肯定することなのだ。哲学はそのような状況が起こりうることを肯定することを基礎に、その状況下での最善策を考えることに貢献しうるのが現実的にはむしろフ

ファーストプライオリティーがある哲学の役割だろう。

あるいは、考えることが役割の哲学にとって、むしろ、その必要性が感じられないから神概念を設定しないが生命や人生を100%肯定することができるという立場のことも示せる。それでも創造主について二点議論するとすれば、一つには神が設定できていれば、生の苦境の時に支えになるようなイメージで、自分以外の超越的な存在に自分の存在を任せる又は頼るという発想が神設定がない人より楽にでき、生き易いと考えることができるのではないか。「困ったときの神頼み」のよう発想である。しかしこれは他力本願で無責任感をもつような弊害も考えられる。もう一つは人間や世界の見方が違ってくるのではないかという点である。例えば、他者との関係がこの世界の同時代存在者として同じ生命として生かされている者同士とを感じるか、各々に人間や世界との関係の考えが任されるかというような違いが生じうるのではないか。どちらにも良し悪しはあろう。最後に生命の神聖性のようなものについて、個人差はあろうが、人間はその生においてどこかの場面でこのことについて考えることが起こることがあるように思う。

参考文献

<グルントテキスト>

Hans Jonas *Das Prinzip Leben* Suhrkamp 1994

- ・『ハンス・ヨナス「回想記」』ハンス・ヨナス、東信堂、2010年
- ・『アウシュビッツ以降の神（叢書・ユニベルシタス）』品川哲彦訳、法政大学出版社、2009年。
(Gedanken über Gott:drei Versuche.1994年)
- ・『生命の哲学－有機体と自由（叢書・ウルベニシタス）』ハンス・ヨナス、法政大学出版社2008年
- ・『責任という原理：科学技術文明のための倫理学の試み』加藤尚武監訳、東信堂、2000年。(Das Prinzip Verantwortung. Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation.1979年)
- ・『主観性の復権：心身問題から「責任という原理」へ』宇佐美公生・滝口清栄訳、東信堂2000年。
- ・『哲学・世紀末における回顧と展望』尾形敬次訳、東信堂、1996年。
- ・『グノーシスの宗教：異邦の神の福音とキリスト教の端緒』秋山さと子・入江良平訳、人文書院、1986年。
- ・『Gnosis und spatantiker Geist』第一部・第二部（1934年—1954年）
- ・『生命の哲学：哲学的生物学を目指し（The Phenomenon of Life:Toward a Philosophical Biology）』（1966年）
- ・『規範としての責任性：技術時代における倫理の探求において（The Imperative of Responsibility:In Search of Ethics for the Technological Age）』（1979年）
- ・『生命の哲学：哲学的生物学を目指し－現象学及び実存主義哲学的研究（The Phenomenon of

Life:Toward a Philosophical Biology [Studies in Phenomenology and Existential Philosophy]]』
(1979年)

・『グノーシスの宗教：異邦の神のメッセージとキリスト教の起源 (The Gnostic Religion:The
Message of the Alien God & the Beginnings of Christianity)』 (1979年)

・『技術、医療、倫理について (On Technology, Medicine and Ethics)』 (1985年)

アリストテレス全集3 自然学 出隆・岩崎光胤訳 (1968年)

The Possibility of 『Das Prinzip Leben』 —Hans Jonas

TAKAHASHI, Takeo

Abstract

The attempt to extract true concept of Philosophy of Hans Jonas from his book “Das Prinzip Leben” and pursue how we can develop abundant philosophical ideas from referring Jonas’s thinking.

In this book, Jonas said if he was asked the question of life “What is the meaning of this adventure?” he would answer “life is merely in danger originally”. Although the Philosophical definition of life can be diverse, the matter Jonas has to deal with in this book is objective form of life is self-interpretation of life as our self-reflection he says. Organism (by metabolism, sense, movement, emotion, perception, imagination, spirit etc.) adapt itself towards world requirement (environment) . Therefore, in the book “Das Prinzip Leben”, Jonas mentions about moral, metaphysics as well in order to research Life.

This paper attempts to make it clear that among arguments of Jonas, how he emphasizes truth in human’s life. And I would like to research how we can be free from his philosophy or developing philosophical ideas through his work and how we can affirm our life 100% positively by our own philosophical ideas to make this world more abundant in meaning or view.

The purpose of this research is to show the theme of this paper (image of what is human) and by doing so, to show how can we make our world abundant in meaning or view by examining Jonas’s philosophy from both good side and bad side. And I suppose that after the examination of his thoughts, we will be able to develop philosophical ideas more affirmatively.